

## 血管浸潤を有する I 期肺扁平上皮癌における臨床病理学的検討

2006 年 1 月から 2010 年 12 月までの間に、当院にて完全切除され肺扁平上皮癌と診断された約 150 人・60 個の病理標本を用いて、臨床病理学的特徴について研究を行います。

### 研究の概要と意義：

わが国において、肺がんは死亡数をもっとも多いがんです。一般にがんによる死亡の原因として、がんの転移が重要な要素となりますが、がんが血管内に入り込むこと（血管浸潤）が、転移の早期過程で重要となります。

肺がんの中では腺がんと扁平上皮がんが 2 大組織型でとなります。そのいずれの組織型においても、血管浸潤を有する外科切除例では、血管浸潤を有さないものと比較して、再発率や死亡率が統計学的に多いことが明らかにされています。しかし、血管浸潤を有するすべての患者さんが再発をきたすわけではありません。血管浸潤の中でも再発に至りやすい特徴があるはずですが、その詳細に関してはほとんど分かっておりません。

一方で、がんの浸潤・進展は、がん細胞だけでなく、その周囲に存在するマクロファージや線維芽細胞、内皮細胞といった間質細胞の存在も重要と考えられています。これらがお互いに影響を及ぼし合って特殊な微小環境を構成し、浸潤・進展をきたします。また最近では、がんの浸潤した血管内の微小環境が転移や再発に関わっている可能性が示唆されています。

そのような背景から、以前我々は血管浸潤を有する I 期の肺腺がんを対象に、浸潤血管内の微小環境を、免疫染色法を用いて評価しました。その結果、がん細胞においては E-cadherin 陽性細胞が、間質細胞においては CD204 陽性マクロファージ、CD34 陽性血管内皮細胞、 $\alpha$ -SMA 陽性筋線維芽細胞が高発現する集団において、統計学的に再発率が高いことが示されました。すなわち、血管内においても、その微小環境の構成にはがん細胞だけでなく間質細胞が強く関わっており、これらの特徴を有する細胞群で構成される微小環境が、転移・再発に寄与する可能性が示唆されました。

一般に腺がんと扁平上皮がんは異なる臨床病理学的背景を有することは広く知られており、浸潤血管の微小環境も同様に異なる可能性が考えられます。そこで今回我々は、血管浸潤を有する I 期肺扁平上皮がんを対象としてさらなる検討を行う方針としました。

血管浸潤を有する肺扁平上皮がんの臨床病理学的な特徴、特に浸潤血管内の微小環境と再発の関係を明らかにすることで、治療開発などへの貢献が期待できます。

### 目的：

今回の研究では、手術で摘出された血管浸潤を有する肺扁平上皮がんの臨床病理学的な特徴、特に浸潤血管内の微小環境と再発の関係を明らかにすることを目的としています。

**方法：**

2006年1月から2010年12月までの間に、当院にて完全切除され肺扁平上皮がんと診断された約150人を対象としております。また、血管浸潤が認められる約60個の病理標本・ブロックを用いて、特に浸潤血管の形態学的、免疫組織学的検討を行います。対象となった患者さんの診療録から、その臨床病理学的特徴に関する必要な情報を収集しますが、情報収集の作業に当たる人員は医師をはじめとする医療知識のある研究者です。

**個人情報保護に関する配慮：**

閲覧する診療録には個人情報が含まれますが、患者さん個人が特定されない方法で情報を収集します。研究患者さん等からのご希望があれば、その方の診療録は研究に利用しないようにしますので、いつでも次の連絡先まで申し出てください。

**照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：**

〒277-8577 千葉県柏市柏の葉 6-5-1

国立がん研究センター東病院 呼吸器内科 久金 翔/ 石井 源一郎

FAX 04-7131-4724/TEL 04-7133-1111